

【海外留学レポート】

# キャンパス・アジアによる韓国留学

## －プログラムの特徴と内容について－

### Studying Abroad in Korea by CAMPUS Asia: About the Features and Contents of the Program

岡山大学大学院社会文化科学研究科 高橋 礼子

TAKAHASHI Reiko

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

キーワード：韓国留学、キャンパス・アジア

#### はじめに

キャンパス・アジアという言葉に、聞き覚えのない方も多いのではないかと思う。岡山大学のキャンパス・アジアについて紹介する Web ページから言葉を借りると、キャンパス・アジアとは、文部科学省による大学の世界展開強化事業のひとつである。「東アジア地域全体を視野に入れた人材育成をめざすとともに、東アジア共同体の実現に貢献する」という目的のもと、日中韓が1校ずつパートナー校を設定し、これら3校が留学生の相互派遣と相互交流を行う。大学ごとにキャンパス・アジアのパートナー校や協定を結んでいる学科、カリキュラムなどの内容は異なる。様々な大学がこの事業に取り組む中、岡山大学では、韓国の成均館大学、中国の吉林大学と連携をとり、相互に交換留学生を派遣している。

私は、2017年8月から2018年6月までの期間、このプログラムを通じて韓国の成均館大学へ交換留学し、韓国での研究や語学の勉強に取り組んだ。ここでは主に、岡山大学でのキャンパス・アジアというプログラムの特徴や内容について紹介していこうと思う。

#### 留學生活の環境

まず、留学先である成均館大学について。歩いて15分ほど行けば、地下鉄に乗ることができ、便利な場所に位置している。また、近くの大通りにあるバス停から仁川国際空港まで、リムジンバスで一時間ちょっとで行き来ができる。周辺は、飲食店やスーパーが立ち並び、雑貨や服や靴を売る店もた

くさんあり、留学中に必要なものを生活用品や食料などを買う際はとても便利である。夜には観光客や学生たちでにぎわい、活気に満ちている。

留学中に滞在していた寮は、成均館大学に最も近い場所にあり、大学への通学でありがたいものだった。留学先に滞在する間は、キャンパス・アジアによる奨学金を毎月受け取ることができ、寄宿舎への寮費は免除されていた。授業料については、日本の大学への納付のみで成均館大学への新たな授業料は負担しなくてよいというものであった。キャンパス・アジアではこのように、毎月給付される奨学金で生活することができるようになっており、留学中の経済面での支援が手厚く整えられている。

### 多くの人々に支えられた留学生活

成均館大学での留学生活は多くの人々に支えられていた。特にキャンパス・アジアのプログラムで私がお世話になったのは、キャンパス・アジアを担当する成均館大学のコーディネーターの先生だった。

岡山大学、吉林大学からやって来るキャンパス・アジアの学生を支援して下さる成均館大学のコーディネーターの先生は、韓国語はもちろんのこと、日本語や中国語も堪能であり、韓国語で説明された内容を日本語や中国語に翻訳して伝達して下さった。また、学校での手続きや韓国語の勉強に役立つツールを日本語で教えていただくなど、非常に助けていただいた。後に紹介するキャンパス・アジアで行われる授業や課外活動に参加する際にも手助けして下さったり、企画して下さったりしていた。一般の留学であれば、最初にぶつかると予想される言語の壁は、コーディネーターの先生に助けていただくことができた。

こうした先生による支援だけではない。成均館大学では、オリエンテーションの際に、留学生5人程度に、1人の韓国人学生のチューターがついたグループが編成される。留学生たちの担当についてくれるチューターの韓国人学生は、英語がとても上手である。チューターは、担当するグループの留学生メンバーに、食事やカラオケなどの誘いをかけ、交流のための機会を設けてくれた。

このような一般の留学生全体につくチューターとは別に、キャンパス・アジアでは、日本への留学経験があったり、これから日本へ留学する予定があったりする韓国人学生を、チューターとして取り次いでくれた。チューターはキャンパス・アジアの学生一人につき数名いたと思う。私を担当してくれた3人の学生はみな日本語を話すことができる学生で、そのうち2人は日本語での日常会話も可能であった。韓国に来たばかりの頃に、外国人登録証や銀行口座開設の手続き、学生証の受け取りや図書館の使い方、印刷機の使い方といった手続き面の支援をしてくれる。日本語を話すことができるので、韓国語が不慣れな内はもちろん、語学の勉強がある程度進んだ際も、日本語で会話をしたり、韓国語と日本語を用いて文化や歴史について教えてくれたりした。

## 合同授業

キャンパス・アジアの学生には、週に一度、語学や専攻の授業で各自取っている授業のほかに、合同授業が設けられていた。それは、日本の岡山大学から来たキャンパス・アジア学生、中国の吉林大学から来たキャンパス・アジア学生、そして成均館大学の韓国人学生が参加する三通会と呼ばれる授業である。ここでは、成均館大学の教授により、『論語』を題材とした、日本語、中国語、韓国語の3か国の言語で書かれた資料を読み解くことをはじめとして、それぞれの国の新聞についても取り上げられた。

この授業では、母国語以外の文章について学生が音読に当てられる。そのため、授業が始まる前に、互いの言語での読み方について教えあう流れが自然とでき、交流が深まる時間となった。この時間には、コーディネーターの先生方がピザやコーラなどの飲食を準備してくださり、夕食を兼ねて他のキャンパス・アジア学生や韓国人学生と交流する時間でもあった。

## 課外活動

月に一回程度の頻度で、課外活動があった。これは日中のキャンパス・アジア学生たちが参加するもので、博物館見学であったり、歴史的建造物の見学であったり、山登りであったり、韓国の学生の課外旅行への同行であったり、昔の国王や王妃や寵妃のお墓である古墳の見学であったりした。この課外活動は、コーディネーターの先生方が企画し引率してくださった。

歴史的建造物については、成均館大学に最も近い、昌慶宮への見学であった。韓国の公務員の方々が昔の衣装を着て当時の様子について再現し、その様子について解説してくれていた。韓国の祝日であったと思う。韓国の歴史ドラマはよく見ていたけれども、その仕草や礼儀作法について、新しく学ぶところが多かった。

山登りに向かったのは、ソウルでも有名な山だった。現地まで道のりもコーディネーターの先生が引率してくださった。山の周辺に着くと、カラフルな登山用の服装の年配の方をたくさん見かけ、健康志向の高さを感じた。山登りにやってくる韓国人の方と話す機会を持つことができ、キャンパス・アジアの他の学生と交流を深めることもできる時間となった。

課外旅行は、歴史を専攻する韓国人学生たちの旅行に同行した。韓国の有名な詩人の生家や資料館、寺院などを巡った。学芸員の方の説明は、コーディネーターの先生がキャンパス・アジアの学生を集めて日本語や中国語で翻訳してくださった。その旅行で泊まった宿は、山の上にポツンとある場所に立ち、時代を感じさせる趣のある場所だった。夜は成均館大学の韓国人の学生たちとゲームをするなどの交流の時間があった。言葉が通じないながらも、意思疎通に必死にゲームに参加したのを覚えている。

韓国の王族のお墓の見学では、印象深かったことがある。王様と王妃のお墓が離れているので、不

思議に思い、引率のコーディネーターの先生に尋ねたときのことだ。これは王と王妃との仲が悪かったからだという歴史の話を受け、お墓が離れていること一つをとってみても、そこには背景となる事情があったことに気付き、とても感動した。歴史の学習とは、ただ何が起こったかということ学ぶだけでなく、その時代どういった人が生きていたのか、その人生はどういうものだったのかということに関心を持つことなのかもしれないと感じた。

## 会食 (hoesig)

会食 (hoesig) と呼ばれるものが、韓国ではよく催される。キャンパス・アジアで会食が行われる際には、学生を韓国の伝統料理のお店に連れて行ってくださった。たくさんのお皿が出てきて、それらを食べ終わるかどうかという時になると、新しい皿が運ばれてくる。目の前にある料理を食べ続けて、もう終わりだろうかと思ってもまだまだ料理が運ばれてくるので、毎回驚きながら食べていた。韓食 (hansig) と呼ばれる料理で、何度か会食で食べに行った。健康的で素朴な料理で、品数が多くとても豪勢に感じた。

ここで本格的な韓国の伝統食に触れることができたと思う。また、こうした場には、成均館大学のキャンパス・アジアに関心のある韓国人の学生が来ていたので、日本や中国に興味のある韓国人学生と話す機会にもなっていた。この会食の場で韓国人の学生と仲良くなると、会食の後にカフェに行き、夜中であるにもかかわらずケーキやコーヒーを頼み、夜遅くまで個人的な話をするという、韓国の学生のような体験をすることができてとても新鮮だった。初対面であるのに心を開いて関わってくれる子に出会うことができたのは、とても幸運で、ありがたかった。

## プログラムの修了式

留学中の授業がすべて終わると、キャンパス・アジアでは、帰国する学生の修了式がある。留学中に研究した内容や、学んだことを発表する場である。英語あるいは韓国語で発表する。ここではキャンパス・アジアの学生ひとりにつき、10分から15分ほど発表の時間が与えられる。

とても印象に残っているのが、この修了式の発表準備の段階のことだ。発表のためのパワーポイントと原稿作りと、帰国や引っ越しのための荷造りを同時に行うので、とても慌ただしかったのが思い出される。発表が終わると、留学生活が終わったのだなと実感した。私の発表は韓国語で行い、出来は良いとは言えないものだった。しかし、日本に帰ってから、私の研究をまとめていく過程での課題をいくつか見つけることができた。

## 終わりに

このキャンパス・アジアでは、歴史の学習への新しい視点を持つことができたと思う。また、自分の専門や語学の勉強だけでなく、他のキャンパス・アジアの学生や韓国人学生との交流の場を通し



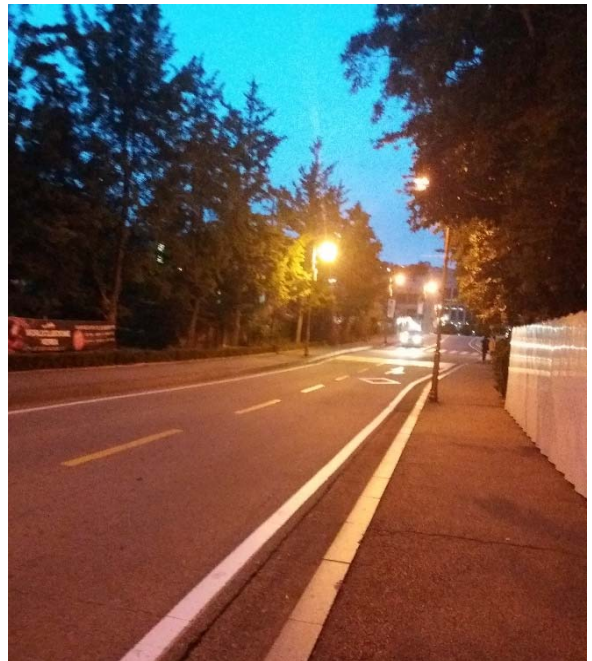
て、日中韓の交流ができたと思う。

私自身の留学生生活を振り返ると、反省点は尽きない。けれども、今回の執筆に際してキャンパス・アジアというプログラムを通して振り返ると、これ以上ないほど多くの人々に支えられ、環境に恵まれていたということに再び気づくことができた。慌ただしく終わったように思えた留学だったけれども、今ようやく私にとっての留学が終わったように感じる。

ここでは、私が覚えている限りのキャンパス・アジアの内容や特徴について紹介してきた。しかし、はじめからこうしたプログラムの存在を知っていたわけではない。もしこれから海外留学を考えているのであれば、各大学で取り組まれている留学プログラムについて積極的に調べてもらいたいと思う。そのプログラムごとの特徴や内容を調べ、多様な機会がひらかれていることを知るためのきっかけになれば幸いである。留学を終えた際に、このプログラムで留学をしてよかったと思えるものに出会えることを願って。



課外活動の風景



合同授業の帰りによく通った道



会食にて